

◆ 干潟 ◆

干潟とは、潮汐の作用で満潮時には水面下に没していますが、干潮時には陸地となる砂泥底の傾斜の緩やかな場所をいいます。河口周辺や川や海から入り込んだ湾状の湖沼などに、河川から運ばれてきた土砂が堆積することによって形成されます。

淀川においては、河口から淀川大堰までの感潮（汽水）域である区間に人工的な造成も含め、柴島、十三、矢倉、大淀、海老江干潟などが存在しています。干潟には、堆積する土砂と一緒に河川からは汚濁負荷源となる栄養塩や有機物が、海からはプランクトンが供給されます。前者は付着藻類や植物プランクトン、バクテリアの餌となり、後者と栄養塩・有機物で増殖した生物は、動物プランクトンやゴカイ類、二枚貝など多くの底生動物の餌となり、さらにこれらは魚や鳥の餌となります。つまり、干潟は、多様な生物の餌場・棲息場として重要な役割を果たし、「干潟生態系」が形成されているのです。また、干出と水没を繰り返すことにより、海水中に大量の酸素が供給されるためバクテリアが活性化し、有機物の分解が促進される機能もあります。合わせて、干潟に生育するヨシ原は、泥や水の中に含まれる栄養塩類を吸収・分解する働きを行います。

干潟は河川・港湾改修や埋立てにより大きくその数（面積）を減らしましたが、「多様な生物の棲息場」及び「自然浄化作用」という重要な機能を有する、注目すべき環境なのです。干潟の保全は、多様な生物を守るだけでなく、私たちの豊かな生活を維持することにも繋がるのです。



●満潮時



●満潮時→干潮時



●干潮時



●アシハラガニ



●イソシギ

環境省 環境カウンセラー
NPO法人 nature works
池田 哲哉

淀川水系の生物多様性を見る・知る・楽しむ
生きもののシグナル

水辺の博物誌



鮮やかな姿で魅了する「青い鳥」

ルリビタキ *Tarsiger cyanurus*

スズメより少し大きめで、オスは背が瑠璃色の美しい姿をしているルリビタキ。淀川水系では広域に生息していて、夏期には山間部で、冬期には平野部の林でも見かけます。バードウォッチャーに人気の高い「青い鳥」で、オオルリほど青色が濃くないので、林の中の日陰でも鮮やかに輝いて見えます。ただし、メスは薄茶色の地味な背色のため、別の野鳥と見間違える人も多いようです。「キョロ キョロ」と、丸みのある口笛のようなさえずりをします。（画/三好智加）



来た・見た・聞いた 淀川雑記帳



今年も「淀川水系一斉美化アクション」が2～3月に開催される。上流から下流まで、各流域の河川レンジャーが地域住民とともに一斉清掃することにより、河川美化、水辺環境保全に取り組む活動である。「ゴミを捨てない」「ゴミは持ち帰る」のマナーアップ意識を参加者と共有。地域住民や来訪者が愛護する美しい淀川水系の定着をめざす。日時や開催地域など詳しくは河川レンジャーのHPを。 ※写真は去年の下流域の様子（編集長・石山郁慧）



多種多様、淡水魚たちの生態と生活史 淀川水系魚類名鑑

希少野生動植物保存推進員
横山 達也

チチブ

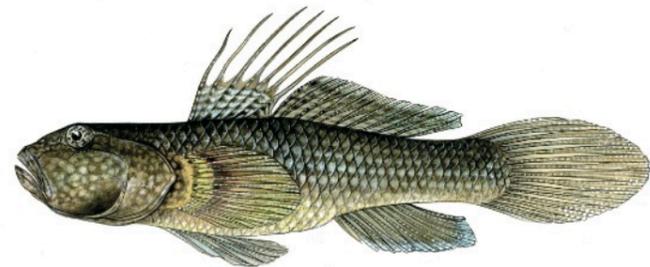
Tridentiger obscurus

本種はスズキ目ハゼ科のグループに含まれています。西日本を中心に本州・四国・九州に分布し、国外では朝鮮半島、中国など東アジア地域から広く知られています。体は、ずんぐりとした体型で、体色は通常、暗褐色をしていますが、変化が著しく、黒一色のものから、明色のものなど、同じ個体でも生息環境などによって様々に変化し、まさに忍者のような魚です。全長は8cmほどで、オスの第一背鰭（頭部側にある背鰭）が糸状に長く伸びることから、伸長しないメスとは明瞭に区別できます。



第一背鰭が長い
◆写真提供 / 川島大助

海と川を往き来する両側回遊魚で、おもに河川の河口域や内湾、純淡水域にも侵入しますが、鹿児島県の池田湖のものは陸封され、湖内で一生を生活しています。産卵期は春～



夏期で、川底にある石の裏側に、卵を産み、オス親が孵化するまで卵を守ります。産まれた仔魚は海へ下り、成長して再び川へ戻ってきます。佃煮や天ぷらなど食用にされている地域もありますが、多くは幼魚のものが多く、成魚はあまり利用されていません。水槽内で飼育すると、なわばりを強く持ち、自分より小型の個体や他種の個体でも、攻撃し鱗などがポロポロにされてしまうことがあり、単独で飼育する方が安定して飼育できます。

under the water

花想鳥感

四季折々、
水辺の生物多様性

高槻市立自然博物館 主任学芸員
高田 みちよ

イタチ

川原や山中の道を歩いていると、道ばたの石やブロック、コンクリートなどの上に、わざと目立つように人の小指サイズのフンが落ちていたりすることがあります。よく見ると木の実や昆虫の翅など、ツブツブしたものが入っているのが見えるでしょう。このようなものはイタチのフンです。イタチは肉食性が強く、昆虫類、ネズミ、小鳥や、魚、アメリカザリガニなどを食べているので、フンの中にはその残骸、とくに甲虫のキラキラした翅が出ていることがよくあります。夜行性の哺乳類は、見ることは難しくても、フン、足跡、食べカスなどで存在がわかります。イタチ類は足跡での区別がしやすく、タヌキ、キツネ、イヌ、ネコの足跡は指が4本しかつかないのに対し、イタチは指が5本なのではっきりわかります。

大阪には在来種のニホンイタチのほか、町中には外来種のチョウセンイタチがたくさんいます。外見で区別することはほとんど不可能ですが、チョウセンイタチは黄色っぽいニホンイタチはチョコレート色っぽい、チョウセンイタチのほうがニホンイタチよりも一回り大きい、などが大まかな特徴です。淀川にいるのはおそらくチョウセンイタチと思われるが、明らかにはなっていません。町では自宅や畑にきたイタチをワナで捕獲することがあり、捕まえたイタチを山や川へ放すことが多く、チョウセンイタチはさらに広



◆写真提供 (上) / 池田哲哉



い範囲に生息するようになってしまっているようです。運がよければ川原や畑、街中でピョンピョンと歩く姿が見られます。観察するのなら、早朝、夕方から夜半がオススメです。

the waterside

the sky & land

水辺の

虫眼鏡

川に棲む水生生物の魅力的な生態

環境省 環境カウンセラー 川島 大助

カワニナの仲間

琵琶湖・淀川水系には18種のカワニナ類の生息が知られています。その中から今回はカワニナとチリメンカワニナを紹介します。これら2種のうち、淀川本川で見られるものは、ほとんどがチリメンカワニナで、カワニナを見ることは稀です。一方、天野川、芥川など淀川の支流ではカワニナをごく普通に見ることができます。

両種とも成貝は殻長25~35mm、全体的に丸みを帯びた円錐形です。チリメンカワニナは縦肋（じゅうりく：貝の成長によって縦にできた成長の跡）が顕著ですが、カワニナにはほとんどありません。両種とも、河川の流れの緩やかな砂礫、砂泥に付着し、付着藻類を餌とします。また、両種が生息する河川では、流れがある流心はカワニナ、流れが小さい水際はチリメンカワニナの主な生息場となります。繁殖期は春と秋で、卵胎生です。メスは卵ではなく、1mmほどの仔貝（胎児殻）を150個体以上放出します。

カワニナはゲンジボタル幼虫の餌としてもよく知られていますが、川の水質指標生物でもあり、少しきかない水域のスコ



カワニナ

チリメンカワニナ

ア値8とされています（スコア値1~10の10段階で10ほど清冽な水域の指標になる）。カワニナ、チリメンカワニナは、冬でも普通に見ることができる身近な巻貝ですので、ぜひ種の同定をしてみてください！

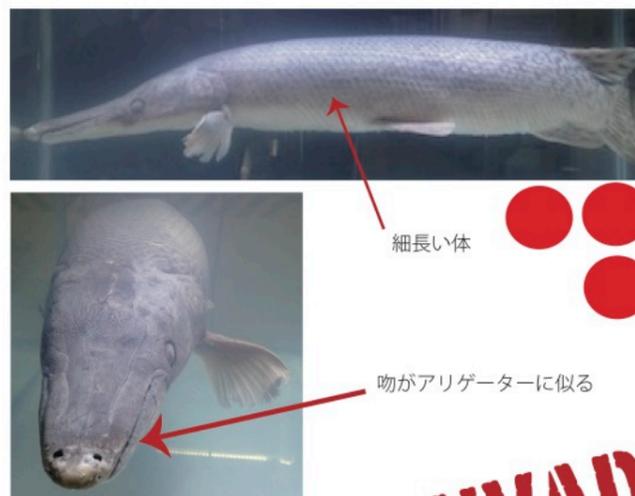
the worst 100

侵略的外来生物

淀川ワースト100

ガー科 アリゲーターガー
Atractosteus spatula

淀川管内河川レンジャー 石山 郁慧



細長い体

吻がアリゲーターに似る

水生生物センターの剥製

AN INVADER

北アメリカに分布する最大の淡水魚。大きくなると全長2m以上にまで成長するそう。体は縦扁していて細長く、体色は黄色がかった緑色や褐色。名前の通り、吻はアリゲーターのようで、鋭い歯が並んでいる。菱形の硬いウロコに覆われており、ウロコや皮は装飾品の材料に用いられることもある。

日本では観賞用として販売されていたが、大きくなるに連れて飼育が難しくなり、放流されたものが各地に棲息。本種の寿命は長く、数十年とも言われている。稚魚は水生昆虫などを食べているが、成魚は甲殻類や魚だけでなく、カメや水鳥を襲うこともある大型肉食魚である。

政府は昨年11月、ガー科全種を特定外来生物に指定する政令を閣議決定。今年2月には指定され、今後は飼育や輸入が禁止される予定。すでに飼っている人は環境省への申請が必要となる。